

オリンピックはレイシズムを 超えなければならない

—Olympismと孫基禎さんの人生を中心に—

講演要旨

寺島善一 先生（明治大学 名誉教授）

2016年10月3日

圖はじめに

ご紹介にありましたように、私は名古屋で生まれました。ナゴヤドームから歩いてすぐの場所です。ドームができる以前は三菱重工大幸工場といって零戦を作っていた所でした。朝鮮半島から強制的に徴用された労働者が多く働いていて、近くの大曽根に集落を作って生活されていたわけです。日本のプロ野球の大投手になられた金田正一さんは大曽根の出身です。私の家から3、400メートルです。私ので、日頃から日本人の差別やいじめ、嫌がらせをこの目でたくさん見て、子ども心に胸が痛んだ思い出があります。なぜこのようなことになるのか。大人になつていろいろな本を読んだり勉強したりする中で、日本による韓半島・朝鮮半島の植民地支配の問題を学んできました。

ソウルオリンピックの旧施設などをいろいろと見学させてもらった時のことです。漢江の近くにある、子どもの国公園にあった、孫基禎記念コーナーを見学した際

に、1936年のベルリンオリンピックのマラソンで日の丸を付けて優勝した孫基禎さん（1912—2002）に、日本オリンピック委員会や陸上競技連盟からの感謝状や表彰状が一枚も送られていないことを知り驚きました。帰国後に学長と相談し、孫基禎さんに明治大学特別功労賞を贈ることにしました。1995年のことです。その頃から私は孫基禎さんと様々な交流を持ち、彼の人生を見てきました。

今日は彼が韓国人として立派に生きた生き様と、東京オリンピックが2020年に開かれようとしているので、この問題とを絡めてお話をすることにします。

■オリンピックとレイシズムは 対極にある思想

今、日本ではオリンピックが騒がれていますが、出てくるのはスキャンダルばかりで、ロゴがどうした、国立競技場がどうなった、そのような話はかりです。

オリンピックがどうしてできて、どういう理念で運営しなければ

いけないのか。今のオリンピック組織委員会の在り方は、そういう理念がまるで欠けてしまっています。

オリンピックとはそもそも何なのか。それは金メダルの争奪合戦でもなければ、国威発揚の場でもないのです。

リオデジャネイロオリンピックが終わった後、NHKの解説者が「オリンピックの目的は国威発揚である」と言ったのです。こういう発言をすること自体、あるいはこういうものの考え方がオリンピック憲章に反しています。また、安倍内閣の閣議で、オリンピックでメダルをたくさん取ることを決定しています。これもオリンピック憲章第57条違反です。

オリンピックはレイシズムと対極にある思想です。レイシズムは人種差別や人間の尊厳を踏みにじる運動や行動のことです。それと全く正反対の、多民族が集まりスポーツをすることで相互理解を促進し、友好連帯を深めるのがオリンピックの理念です。2020年の開催地が東京に決まったとき、